column 7

フィンランドから大阪老舗銭湯にやって来た 幻のタイル絵

フィンランド人訪日浴場ツアーで訪れた、大阪新世界の老舗銭湯ラジウム温泉で、運命の出会いがありました。女湯のカランで、参加者のライリさんと私が並んで身体を流していたときのこと。2人ともふと同じものに目が止まり、同時に「ええっ」と声を上げたのです。

私たちの視線の先にあったのは、カランの壁に埋め込まれた、さまざまな花の描かれたセラミックタイルたち。これらはすべて、フィンランドで生涯をかけて陶板作品をつくり続けた陶芸家、ヘルヤ・リウッコ＝スンドストロム（Heljä Liukko-Sundström）の作品に間違いありません。浴室内を見渡せば、なんと壁のそこかしこに、彼女の希少な初期のタイル作品が埋め込んであるではないですか!

興奮した私たちは、湯上がりに番台で事情を尋ねました。すると、内線で呼ばれて真相を語りに来てくださったのは、先代オーナーの田前二郎さん。実は彼は、本場のサウナを視察しようと、1960年代後半にフィンランドに渡航。そのときとある店で、これは気鋭の女性作家の作品だよと勧められたのが、まだ駆け出し期のヘルヤのタイル絵だったというのです。田前さんはそれを気に入り片っ端から購入したものの、長らくタンスの肥やしに。2008年のお店の改装時にふと思い出し、浴室内の壁に埋め込むことに決めたのだそうです。

私自身も生前お会いしたことのあるヘルヤさんが、その後のフィンランドでいかに素晴らしい作品を残し続けたかを田前さんにお伝えすると、半世紀越しに知れた真実をとても喜んでくださいました。一方、思い出話のなかで飛び出た、彼がヘルシンキで訪れ、賑やかな雰囲気が印象的だったという公衆サウナ。話を照合するに、今やヘルシンキ現存最古となった、コティハルュ公衆サウナではないですか。私たちも思いがけず、あのサウナが60年前から変わらない雰囲気を保っていることをまさかの大阪で知れて、じんと胸を熱くしたのでした。

なお、奇しくもヘルヤさんは私たちの訪問の半年前に亡くなり、また、田前二郎さんも私たちの訪問の半年後にお亡くなりになったと伺いました。お2人の御冥福をお祈りするとともに、生前にお目にかかれた奇跡に改めて感謝したいと思います。